

令和 4 年 6 月 7 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K01633

研究課題名（和文）幼児期におけるからだを動かす遊びが非認知能力を育む可能性に関する実証研究

研究課題名（英文）Empirical Study on the Possibility of Physical Play in Early Childhood to Develop Non-Cognitive Skills

研究代表者

鈴木 裕子（Suzuki, Yuko）

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：40300214

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）： 幼少期におけるからだを動かす遊びにおける、非認知能力の醸成に関連する規定因と機序の解明が本研究最終目標である。本課題期間では、幼少期のからだを動かす遊び経験が、その後の非認知能力の発達に影響を与えるという仮説に対して、3つの調査を、定性的、定量的の両面から分析検証した。幼少期に経験した遊びに対して、固有の主観的恩恵を感じている様相が捉えられ、非認知能力と、幼少期のからだを動かす遊びの中で味わった質との関係に共通性が見られた。幼少期のからだを動かす遊び経験が影響を与えているという本研究の仮説が支持されたと考え、幼少期のからだを動かす遊び経験は、非認知能力の醸成に影響を与えることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的意義は2点ある。

1点目は、幼児教育の中心的課題でありながら、未だエビデンスの少ない非認知能力という概念に対して、幼児期のからだを動かす遊びが非認知能力を育むことに有効であるという仮説の実証的な解明がなされたことにより、今後、保育の質そのものを高めるための典型性の高い知見となることが期待できることである。2点目は、からだを動かす遊びの種類と非認知能力との関連を示したことによって、からだを動かす遊びの心理社会的側面に注目した視点の導入がなされ、内容の精選、援助のあり方などへの示唆が得られ、幼児期のからだを動かす遊びに新たな価値を付加できたことである。

研究成果の概要（英文）： The ultimate goal of this study is to elucidate the determinants and mechanisms related to the development of non-cognitive skills in the early childhood experience of physical play. In this research project, three surveys were analyzed both qualitatively and quantitatively to test the hypothesis that childhood experiences of physical play influence the development of non-cognitive abilities in later life.

The results showed that the participants perceived unique subjective benefits from their childhood play experiences, and that there was a commonality in the relationship between non-cognitive skills and the quality they experienced during their childhood physical play experiences. The results support the hypothesis that childhood experiences of physical play are influential, implying that childhood experiences of physical play influence the development of non-cognitive skills.

研究分野：身体教育，子ども学，保育内容論

キーワード：非認知能力 非認知的スキル 社会情動的スキル 幼少期 からだを動かす遊び 自伝的記憶 主観的恩恵 選及的調査

## 1. 研究開始当初の背景

非認知能力(スキル)の育成が、幼児教育の中心的なテーマになりつつあり、平成30年度改訂の幼稚園教育要領や保育所保育指針には、その内容が多く盛り込まれている。非認知能力は、IQなどで数値化される認知能力に対する用語であり、目標達成、他者との協働、情動の制御に係わるスキルであり、幼児期での育成が効果的とされている。非認知能力は日本だけではなく世界中で研究が進み、その重要性が認識されている。しかし幼児期の非認知能力がどのように発達するかについては、保育の質、遊び体験などに影響されるという報告はあるものの、具体的な対象や内容との関係は明らかにされていない。本邦の幼児教育・保育では、非認知能力の育成を上位のねらいに掲げるよりも、遊びの質を向上させることにつとめ、そのなかで非認知能力とは何かを「見える化」することが大切ではないかという考え方が強調されている。しかし現段階では、非認知能力を育てる活動を、どう取り入れればよいのか、どういう活動によってそれは育まれるのかという研究は始まったばかりであり、十分なエビデンスは得られていない。

一方、筆者は、これまで一貫して幼児期のこころとからだの相互作用を追究してきた。採択された科研費課題を中心にした研究を経て、「活動意欲形成と身体活動量増強とは互恵的な関係をもつ」とことと「身体的な感性はコミュニケーション能力の基礎となる」という2つの研究成果を得た。そのうえで、現代の子どもたちの育ちの状況を、身体的な感性という視点で見つめたときには、日々の生活や遊びに生気がなく、対人関係でも意欲がなくぶつからない、他者への反応として身体が動き出さず遊びを共有できないなど、能動的な身体への応答性や身体的な共感性の弱さが浮き彫りにされてきた。これらは遊びの質の変容に伴った活動レベルの低下と無関係ではないと考えられた。そこで、この問題を焦点化する切り口として、保育現場における子どもたちの「遊び込める」という概念を具体化することで遊びの質を高める研究に取り組んだ。特に「遊び込める」を規定する要因を明らかにする手だてとして5因子23項目尺度の開発を行い、その後、本尺度を用いて、「からだを動かす遊び」として、自由遊びのなかでのドッジボールや鬼ごっこ、身体表現遊びを対象に、遊び込める状況への変容がどのように遊びの質を高めていくかを検証した。そこでは、からだを動かす遊びのなかで育つ要素が可視化され、遊びを中心とした教育に新たな価値を付与するひとつの知見が得られた。

しかし、ここで新たに、では子どもたちはからだを動かす遊びのなかで、「遊び込める」ようになることによって、どのような力が獲得され、それがその後の生活にどのような影響を及ぼすのかという問いが生まれた。この問いの解決に接近できる手だてとして、この問いをこれまでの研究成果と結びつけ発展させられる概念として、「非認知能力」の導入を着想するに至った。

## 2. 研究の目的

本研究が目指すのは、幼少期におけるからだを動かす遊び経験における、非認知能力の醸成に関連する規定因と機序を明らかにし、同時にからだを動かす遊びの意義を再考することである。その第一段階として、本研究では、幼児期におけるからだを動かす遊び経験が、非認知能力の獲得に影響を及ぼすという仮説の実証を目的としている。

なお、本研究における「からだを動かす遊び」とは、「身体活動、運動遊び、集団ゲーム遊び、身体表現遊び、戸外遊び、自然体験など保育現場で用いられている呼称を、こころの動きを含んだ「まるごとのからだ」を「活発に動かして」行う「遊び」の総称として定義する。

## 3. 研究の方法

本研究では、以下の3つの調査を実施した。

### 研究1：幼少期におけるからだを動かす遊び経験における非認知能力への影響の量的検討

目的：大学生を対象とした質問紙調査を実施し、幼少期におけるからだを動かす遊び経験から現在の非認知能力への影響を、仮説モデルを基本モデルとした共分散構造分析により検討した。

調査時期：2017年10月～2018年1月

対象者：全国8大学10学部22学科大学生(18歳～27歳)607名(男227名、女380名)

調査内容：

・大学生現時点での非認知能力として、ビッグファイブ性格特性(FFPQ-50)を5件法で自己評定させた。FFPQ-50は、NEO PI-R (NEO Personality Inventory)のように国際的にも標準的に使用されている性格特性の5因子モデル検査に準拠して、日本人のパーソナリティ理解という観点から作成された性格検査である。

・幼少期のからだを動かす遊び経験として、遊びの種類、遊びの姿(遊び込む)遊び方(身体活動性)、遊びの場所、を要素とした。これらは、既存の尺度や、既存の分類や理論を援用した。それぞれの要素に対して、幼少期の振り返りを5件法で評定させた。

### 研究2：幼少期におけるからだを動かす遊び経験における非認知能力への影響の質的検討

目的：研究1による量的な検討によって得られた結果に基づき、関係を質的に分析考察する。非認知能力との関連をテキストマイニングによって共起ネットワーク分析を実施し、自伝的記憶における自由記述の可視化を試みる。

調査時期：2018年10月～2019年1月

対象者：全国7大学10学部26学科大学生(18歳～26歳)202名(男93名、女129名)

調査内容：

・大学生現時点での非認知能力としてビッグファイブ性格特性の中で、研究1で有意な結果が得られた外向性、愛着性、統制性、遊戯性の両極を各性3段階、両性6段階で自己評定させた。

・「あなたの印象に残っている幼少期(幼稚園・保育園・小学校低学年頃まで)に経験した「から

だを動かす遊び」について語ってください。」としてエピソードとして自由記述させた。  
 分析方法：解析ソフトとしてKH Coder2 (樋口, 2014a, 2014b)を使用し、テキストマイニングに基づいて分析を行った。テキストマイニングは、文章という定性的なテキスト情報を系統的な分析手続きを残しながら処理し、数量化と視覚化を質的研究に取り込んだものである。質的なテキストデータを数値データと同じように扱うため、分析者の恣意を減らすことができる。

### 研究：幼少期におけるからだを動かす遊び経験の自伝的記憶に対する主観的恩恵としての非認知能力との関連

目的：幼少期のからだを動かす遊びに対する自伝的記憶と、主観的な恩恵としての非認知能力の関連を検討することをねらいとした。幼少期のからだを動かす遊びで得られた非認知能力は、幼少期のどのような遊びの中で醸成されたのかを考察する。研究では、非認知能力として、OECDによって定義された「目的を達成する力」「他者と協働する力」「情動を制御する力」を採用した。

調査時期：2020年10月～1月

対象：全国の大学生322名(男性128名、女性184名、18歳～25歳、16大学12学部29学科)

調査内容：

- ・幼少期におけるからだを動かす遊びによって得られたと自身が感じる社会情動的スキルへの恩恵の程度を4件法で評価させた。
- ・印象に残っている幼少期におけるからだを動かす遊び経験を自由に記述させた。

分析方法：KH Coderを用いてテキストマイニングに基づいて分析した。

## 4. 研究成果

### 研究：幼少期におけるからだを動かす遊び経験における非認知能力への影響の量的検討

幼少期のからだを動かす遊び経験から現在の非認知能力への影響について3つの解析を実施した。解析1では、幼少期におけるからだを動かす遊び経験の総合因子と非認知能力総合因子との関係进行分析し、その係数が0.70となり、影響度が高いことが認められた。解析2では、幼少期におけるからだを動かす遊び経験の総合因子と非認知能力の各種潜在変数との関係进行分析し、からだを動かす遊び経験が影響を及ぼす非認知能力は、愛着性が0.350と最も高く、外向性(0.276)、遊戯性(0.241)が続いた。解析3(図1)では、幼少期におけるからだを動かす遊び経験の各種潜在変数と非認知能力の各種潜在変数との関係进行分析した。最も強い関連が認められたのは遊びの姿勢としての遊び込む経験と愛着性であった(0.701)。次いで身体活動性の高かった遊び経験と外向性(0.600)、遊びの種類として活動的な遊びを多くした経験と遊戯性(0.412)、遊びの姿勢としての遊び込む経験と統制性(0.323)が続いた。

以下に総括された。

- 1) 幼少期に遊び込んだ経験を記憶している者は、現在の性格特性において愛着性が高いと評価する。
- 2) 幼少期に遊び込んだ経験を記憶している者は、現在の性格特性において統制性が高いと評価する。
- 3) 幼少期遊びにおいて身体活動性が高かったという経験を記憶している者は、現在の性格特性において外向性が高いと評価する。
- 4) 幼少期に動的な遊びを行ったという経験を記憶している者は、現在の性格特性において遊戯性が高いと評価する。

幼少期の振り返りという偏りの制御が難しい影響関係のモデルとしては、一定の結果として許容できると考えられる。以上のことから、幼少期におけるからだを動かす遊び遊び経験が、その後の非認知能力の形成に影響を与えていることが示唆された。

### 研究：幼少期におけるからだを動かす遊び経験における非認知能力への影響の質的検討

分析対象となった349エピソード(1人あたり1.7エピソード)に対して、処理後の総抽出語数は43545語、使用語数14427語、異なり語数3693語、使用語数3315語となった。幼少期のからだを動かす遊び経験についての自伝的記憶にもとづく主観的恩恵を特徴づける抽出語上位と出現回数を見てみると、語の意味から、年代、いつ、ところ、ひと、もの、こと、する、どんな、の8つの観点に分けられた。多く出現したのは、ひと：「友達」の204回、どんな：「好き」131回、「楽しい」113回、こと：「鬼ごっこ」91回、ところ：「自宅の近所」71回など見られた。続いて、ビッグファイブ性格特性の自己評定点と関連が強い語について、共起ネットワーク分析図を作成し、その後、KWICコンコーダンスのコマンドを用いて、抽出語がどのように用いられているかを文脈から探り質的な検討を試みた。

(1)外向性と内向性(表示語数51語、表示共起関係81、Jaccard係数.066)

大人になってからの性格特性に対して外向性の自己評定が高かった者の自伝的記憶は、サッカー、野球、ボール、鬼ごっこ、遊具遊び、毎日などの語との共起関係が強い。自伝的記憶として「兄や仲の良かった年上の子と、野球、サッカー、ドッジボール、鬼ごっこをした」という典

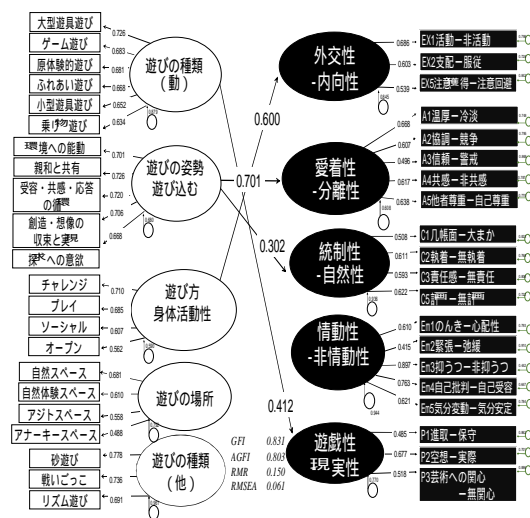


図1 解析3：遊びの各種潜在変数と非認知能力の各種潜在変数との関係



型例が挙げられる。それに対して、内向性を高く評定した者では泥、一人、嫌いなどの語との共起関係が強い。「外で遊ぶよりも、兄弟姉妹2人、もしくは1人で黙々と遊んだ」という傾向の自伝的記憶が読み取れた。

(2)愛着性と分離性 (表示語数 51 語, 表示共起関係 80, Jaccard 係数 .063) (図 2)

大人になっての性格特性に対して自己評定が高かった者は、友達、砂遊び、外遊びなどの語との共起関係が強い。「友達と一緒に、砂遊び、鬼ごっこなどの外遊びをすることが楽しく大好きだった」という自伝的記憶の典型例が読み取れた。それに対して分離性を高く評定した者は、負けず嫌い、不満などの語との共起関係が強い。「負けず嫌いで、うんていができないのが悔しくて、父母が呼びに来るまで、手が痛くなるほど練習した」という自伝的記憶が語られていた。

(3)統制性と自然性 (表示語数 nods61 語, 表示共起関係 edge90, Jaccard 係数(Density) .049)

大人になってからの性格特性に対して統制性の自己評定が高かった者は、時間、戸外、父親、不満などの語との共起関係が強い。「負けず嫌いだっただけ、仲良しの子や父と時間を忘れて暗くなるまで野球した。

友達と一緒に、砂遊び、鬼ごっこなどの外遊びをすることが楽しく大好きだった」という自伝的記憶が読み取れた。それに対して、自然性を高く評定した者は、年上の子、帰る、ルールなどの語との共起関係が強い。「家へ帰るとすぐに遊びに行った。ルールを自分たちで変えられるような遊びが好きだった。ドッジボールは怖かった」という傾向の自伝的記憶が語られていた。

(4)遊戯性と現実性 (表示語数 nods60 語, 表示共起関係 edge82, Jaccard 係数(Density) .046)

大人になっての性格特性に対する自己評価が高かった者は、秘密基地、持つ、競争、練習、友達などの語との共起関係が強い。「友達と、物を持ち込んで考えて使いながら、秘密基地ごっこをした。競うことも楽しかった」という自伝的記憶が典型例として読み取れた。それに対して、現実性を高く評定した者は、野球、ゲーム、怖いなどの語との共起関係が強い。「毎日のように、年上の子や兄などと一緒に、サッカー、野球などのゲームをした」という自伝的記憶が語られた。

## 研究 : 幼少期におけるからだを動かす遊び経験の自伝的記憶に対する主観的恩恵としての非認知能力との関連

(1)階層的クラスター分析による幼少期におけるからだを動かす遊び経験に関する頻出語の分析

分析対象となった自伝的記憶における肯定的エピソード 453, 否定的エピソード 374 に対して、総抽出語 22541 語, 分析対象となった語 8549 語, 異なり語数 2191 語, 使用語数 1929 語となった性・肯定的・否定的の別における 4 タイプの頻出語を用いて、凝集型階層的クラスター分析法における Ward 法を用いた階層的クラスター分析を行った。集計単位は文, 最小出現数は総数に照らして 8~20 として分析した。1.0 以下のレベルで結び付いた出現語を 1 クラスターとし、それらの出現語から捉えられる特徴をクラスター名として命名した。

男性・肯定的な自伝的記憶エピソードでは、第 1 クラスターが「休み時間のドッジボール」、第 2 クラスターが「小学校低学年の頃のいろいろな遊び」となり、8 クラスターに分類された。階層構造では「小学校低学年の頃のいろいろな遊び」と「幼稚園・保育園の頃の三輪車」「山を作ったり登ったり」と「近所の友達と一緒にした遊具を使った遊び」とが結びつきが強い。抽出後の文脈から、集団的な遊びや、その際のダイナミックな動きを伴う遊びを肯定的な記憶として抱いていることが示された。女性・肯定的な自伝的記憶エピソードでは、9 クラスターに対して、「一輪車、縄跳び、鉄棒などの練習の結果に伴う成就感」と「自宅近所での仲良しとの遊び」「いろいろな遊びの経験」の 3 つの階層が見られた。「克服型の運動遊具を使った練習をし、それができるようになった経験」「戸外でのいろいろな遊びをいろいろな人とした経験」を肯定的な記憶として抱いていた。対して、男性・否定的な自伝的記憶エピソードの階層構造では、からだを動かす遊びに対する「得意でないという思いからの劣等感」と「嫌悪感」の階層が見られた。他者との相対的な比較から生まれる劣等感が否定的な記憶となっている傾向が示された。女性・否定的な自伝的記憶エピソードでは、第 1 クラスターが「ドッジボールでの痛い思い」、第 2 クラスター「足の速い子に勝てない鬼ごっこ」となった。男性の否定的な記憶では他者との相対的な比較に端を発しているのに対して、からだを動かす遊びの中でのひと、もの、ことから受ける恐怖心や不快感が否定的な記憶となっている傾向が示された。

(2)主観的恩恵としての非認知能力と幼少期におけるからだを動かす遊び経験との関連

幼少期の自伝的記憶としてのからだを動かす遊び経験を、非認知能力に対して、どのような主観的な恩恵として捉えているのかを、テキストマイニングによる共起ネットワーク分析から考察した。各要因に対する主観的恩恵の評価の高低と肯定的な自伝的記憶エピソードとの関連、否定的な自伝的記憶エピソードとの関連を示した各共起ネットワークを、性別に示した。

目標を達成する力(下位概念: 忍耐力, 自己抑制, 目標への情熱)

幼少期のからだを動かす遊びに対して「目標を達成する力」の主観的恩恵を高く評価し、かつ肯定的な自伝的記憶を語る男性では、公園、逃げる、人、自分、体、いろいろの語に高い頻出性や共起性が認められる。これらの語を含むエピソードに戻ることを繰り返すと、典型的な記述とし

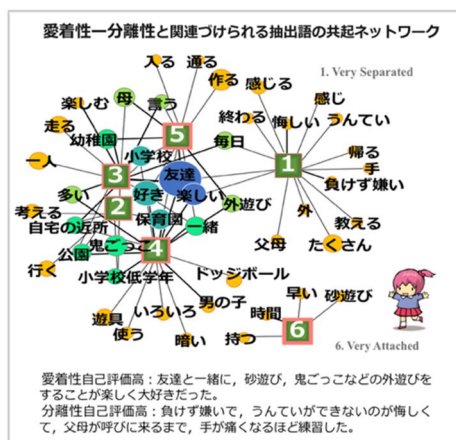


図2 テキストマイニングによる共起ネットワーク

で、「特に公園で泥警などの鬼ごっこをすることが多かった。足が速く逃げるのがうまかった。」

「体を動かすことが好きだったことをよく覚えている」が示された。

対して否定的な自伝的記憶を語る男性の典型的な記述として「ドッジボール、鬼ごっこなど、楽しくない思い出だった。運動が得意でなかったので、遊びの中で周りの人いろいろな言われるのが嫌だった。」が見られた。その対極として「目標を達成する力」の主観的恩恵を低く評価し、かつ否定的自伝的記憶を語る男性では、鬼ごっこ、ドッジボール、走る、遅い、運動、楽しい、子といった語に頻出性や共起性が認められ、典型的な記述として、「鬼ごっこをするのが嫌だった。鬼になっても全然つかまえられなかった」「失敗することを考えることが辛かった。」「参加しないようにしていた。」が見られた。鬼ごっこやドッジボールにおいて、自分の能力に対して肯定感を持ち、成し遂げられる予測や自信をもって頑張ったこと、そのようなエネルギーを感じていた記憶、目標への情熱や忍耐力がもてる機会になったことが、「目標を達成する力」を得ていたという思いと結びついていた。一方で、周囲からの視線や圧力に対して自分の気持ちを耐え保ちながら遊んだことが記憶になっている場合、言い換えれば、自己抑制がマイナス方向に過剰に行なわれていたという記憶をもった場合に、からだを動かす遊びの中で「目標を達成する力」を得たという恩恵を感じづらいことが読み取れた。

女性に対しても分析考察を実施した。からだを動かす遊び、特に鬼ごっこなどに対して一心な情熱をもって臨んだことが強い記憶として残っている者に対して、失敗を避け参加に消極的だった記憶を抱くという異なる傾向、ドッジボールで痛い思いや嫌な思いを強く記憶する女性において、「目標を達成する力」を得たという主観的恩恵を感じづらいことが読み取れた。

他者と協働する力（下位概念：社交性、敬意、思いやり）

「他者と協働する力」の主観的恩恵を低く評価し、かつ否定的自伝的記憶を語る男性では、人、年上、言う、遊ぶ、家、鬼、の語に頻出性や共起性が認められ、からだを動かす遊びにおいて、私と他者との関係を自身にとって肯定的に捉えるか否定的に捉えるかによって、恩恵の受け止めの程度に差が生じていることが示唆された。

主観的恩恵を低く評価し、かつ否定的自伝的記憶を語る女性では、小学校低学年、入れる、子、言う、怖い、の語に頻出性や共起性が認められ、幼少期のからだを動かす遊びから協働的な力を得たという恩恵を感じる女性は、ルールのある遊びへの志向が顕著に見られるのに対して、その恩恵を低く評価している女性では、遊びに対する自身の劣等感や嫌悪感から他者と共同する集団的な遊びに対して否定的な記憶を抱いていることが読み取れた。

情動を制御する力（下位概念は、自尊心、楽観性、自信）

男性では、サッカーやドッジボールなどのボールを使った遊びや鬼ごっこといった遊びに対する想いの記憶が主観的恩恵の高低に影響を及ぼしていることが読み取れた。

「情動を制御する力」に対する主観的恩恵を高く評価し、かつ肯定的な自伝的記憶を語る女性では、友達、自分、遊具、練習の語に頻出性や共起性が認められた。さらに対極にある「情動を制御する力」の主観的恩恵を低く評価し、かつ否定的自伝的記憶を語る女性では、友達、怖い、ドッジボール、小学校低学年、投げる、の語に高い頻出性や共起性が認められた。情動は、かつては「理性を妨げるもの」であるとされてきたが、近年、情動は自他に対するシグナルであり、コミュニケーションを生み出すものとしての社会的機能を持つと考えられるようになっている。怖くてからだ動かさない、辛くてやる気になれないなど、からだを動かす遊びへの挑戦を阻む要因となっていることが、共起された語句や典型的な記述から読み取れる。こういった情動を制御できるのが、自分の能力を信じている気持ちとしての自信や、自分の価値を認める自尊心となっており、それによっての物事を楽観的に、あるいはポジティブに捉える様子が読み取れた。

## 総括

本研究では、幼少期のからだを動かす遊び経験が、その後の非認知能力の発達に影響を与えるという仮説を、定性的、定量的の両面から分析検証した。パーソナリティ特性因子別、それぞれの特性の双極によって、さらには社会情動的スキル別に関連を分析すると、幼少期のからだを動かす遊びの経験に対して異なる傾向の特徴的な経験を語る傾向が見られた。同時に、現在の自分の非認知能力としての性格特性、社会情動的スキルと、遊びの中で味わった質との関係に共通性が見られた。幼少期に経験した遊びに対して、固有の主観的恩恵を感じている様相が捉えられたとも言い換えられる。その時点およびそれまでの時間でのその個人の内外にある様々な要因によりバイアスがかかってはいるものの、幼少期のからだを動かす遊び経験が影響を与えているという本研究の仮説が支持されたと考え、幼少期のからだを動かす遊び経験は、非認知能力の醸成に影響を与えることが示唆された。

今後は、長期的前向きな縦断的調査が必要と考える。今回の調査は、非認知能力としてのパーソナリティ特性と、幼少期のからだを動かす遊び経験との関連が絞られたことから、対象とすべきコホートや、測定すべき要因や帰着点の観点などの示唆的な視点を獲得することができたと考えられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 Yuko SUZUKI	4. 巻 Vol 4, No 3
2. 論文標題 The Effect of Physical Play Experiences on Early Childhood Non-Cognitive Skills Development	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Education and Development	6. 最初と最後の頁 54-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20849/jed.v4i3.827	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木裕子, 森佑季	4. 巻 20
2. 論文標題 子どもの「楽しむ」を保育者はどのように評価しているか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 幼児教育研究	6. 最初と最後の頁 45-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田村 佳世, 鈴木裕子	4. 巻 69
2. 論文標題 保育における安全・危険に対する保育者と保護者の判断根拠の相違 - 保護者対応と安全教育を焦点として -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛知教育大学研究報告, 教育科学編	6. 最初と最後の頁 49-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 渡邊ユリナ, 鈴木裕子	4. 巻 5
2. 論文標題 幼児の生活の中に見られる音楽との出会い	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要	6. 最初と最後の頁 41-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yuko Suzuki	4. 巻 Volume 9, No2,
2. 論文標題 Characteristics of Physical Expression Activities Among Young Children :How Physical Contact Influences the Body and Expression	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Modern Education Review	6. 最初と最後の頁 109-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 磯村正樹, 鈴木裕子	4. 巻 4
2. 論文標題 幼児期における対人理解と仲間関係の関連 5歳児における「他児の喜びを自らの喜びと感ずる」姿に焦点を当てて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要	6. 最初と最後の頁 41-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yuko Suzuki , Hideki Suzuki	4. 巻 7
2. 論文標題 Psychosocial Effects of Physical Play in Early Childhood	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of Modern Education Review	6. 最初と最後の頁 894-905
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 裕子, 山口友理子, 南 曜子	4. 巻 19
2. 論文標題 「音楽にノる」「裏拍をとる」ための動きの要素 熟達者と未熟達者による実験試技の比較を通して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 幼児教育研究	6. 最初と最後の頁 55 - 64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木裕子	4. 巻 21
2. 論文標題 幼少期におけるからだを動かす遊び経験と非認知能力の関連性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 幼児教育研究	6. 最初と最後の頁 27-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 Yuko SUZUKI
2. 発表標題 The Relationship between Autobiographical Memories of Physical Play Experiences in Early Childhood and Non-Cognitive Skills as Subjective Benefit
3. 学会等名 PECERA 20th Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木裕子
2. 発表標題 非認知能力の醸成と幼少期におけるからだを動かす遊び経験の関連
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡邊拓真, 鈴木裕子
2. 発表標題 幼児間における強い身体接触の役割 3, 4, 5 歳児の事例検討を通してー
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第30回大会
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 Yuko Suzuki
2. 発表標題 The Effect of Physical Play Experiences on Early Childhood Non- Cognitive Skills Development
3. 学会等名 European Early Childhood Education Research Association (EECERA)The 29th Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuko Suzuki
2. 発表標題 How Caregivers Determine Whether Young Children Are Experiencing Enjoyment
3. 学会等名 Pacific Early Childhood Education Research Association (PECERA) The 20th Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木裕子
2. 発表標題 非認知能力に影響を与える幼少期におけるからだを動かす遊び経験 ナラティブからの分析
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木裕子
2. 発表標題 幼児期のからだを使った遊び(身体表現)が非認知能力に及ぼす影響
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第29回大会 大会企画シンポジウム(幼児期において表現活動が育む非認知スキル)(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊拓真, 鈴木裕子
2. 発表標題 攻撃的に見える身体接触が幼児間の相互作用に及ぼす影響—年齢別特徴に着目して—
3. 学会等名 共創学会第3回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuko SUSUKI
2. 発表標題 The Effect of Physical Play in Early Childhood on Non-Cognitive Skill Development
3. 学会等名 The Pacific Early Childhood Education Research Association (PECERA) 19th Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木裕子
2. 発表標題 幼少期におけるからだを動かす遊び経験が非認知能力に及ぼす影響
3. 学会等名 日本保育学会 第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yuko Suzuki
2. 発表標題 Characteristics of Physical Expression Activities Among Young Children - How Physical Contact Influences the Body and Expression -
3. 学会等名 Pacific Early Childhood Education Research Association (PECERA) 18th Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木裕子
2. 発表標題 幼児は身体表現活動のなかで何を経験しているのか
3. 学会等名 日本保育学会 第70回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 磯村正樹, 鈴木裕子
2. 発表標題 幼児が他児の喜びを自らの喜びと感じる姿
3. 学会等名 日本保育学会 第70回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yuko SUZUKI
2. 発表標題 Extraction of non-cognitive skills perceived as having subjective benefit from autobiographical memory of Physical Play Experiences in Early Childhood
3. 学会等名 Pacific Early Childhood Education Research Association (PECERA) 21th Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木裕子
2. 発表標題 幼少期におけるからだを動かす遊び経験に対する自伝的記憶と主観的恩恵としての非認知能力の関連
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会
4. 発表年 2021年

## 〔図書〕 計4件

1. 著者名 鈴木裕子（編），名須川知子（監修），大方美香（監修），二見素雅子，大庭三枝，富田久枝，西垣吉之，田村佳代，橋村晴美，木曾陽子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 219
3. 書名 はじめて学ぶ保育 第5巻 保育内容総論	

1. 著者名 JASA、体協、日体協、竹中 晃二、鈴木裕子、上地広昭、日本体育協会	4. 発行年 2017年
2. 出版社 サンライフ企画	5. 総ページ数 157
3. 書名 子どものプレイフルネスを育てるプレイメーカー：プレイフルネス運動遊びへの招待	

1. 著者名 名須川知子、大方美香、谷村宏子、鈴木裕子、永井毅、石井浩子、門脇早穂子、保田恵莉、磯野久美子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 220
3. 書名 保育内容の指導法	

1. 著者名 横井志保、奥美佐子、鈴木裕子、渡辺桜、水野伸子、長江美津子、野田美樹、大島未希奈、仙石美千代、高須裕美、小杉裕子、王寺直子、西原和哉、丁子かおる、花岡晶子、久保葉子、平野真紀、南元子、西村志磨、柴田智世	4. 発行年 2018年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 208
3. 書名 表現	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------